

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Αισθηματοποιομαλ : カヴァフィス詩における記憶とエロス
Author(s)	茂木, 政敏
Citation	プロピレア , 29 : 58 - 64
Issue Date	2023-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054846">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054846</a>
Right	Copyright (c) 2023 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



## Αισθηματοποιούμαι

### — カヴァフィス詩における記憶とエロス —

茂木 政敏

これからコンスタンディノス・カヴァフィスのエロス詩について考えていくが、男性同性愛とか少年愛といった彼の性対象について特に記述を割こうとは思わない。それというのは、対象をこれと名指しすることと欲望のうねりを語ることは雲泥の差があるからだ。リアリズム的傾向とでもいうべきか、作品を対象物の描写としてみる観点はこの場ではとらない。実際、美少年よりも彼の作品に頻出する数字のほうが、カヴァフィス的エロスについて多くを示唆しているかもしれない。

突飛な考えだろう。こんな考えを私も最初から抱いていたわけではない。頻出する数字についてせいぜいカヴァフィス個人の書き癖ぐらいにしか、初めは思っていなかった。転機になったのは、彼の第一回アテネ旅行(1901年)の日記<sup>1</sup>を読んだ時だった。小説家クセノプーロスとの出会いや売春街に興ざめるカヴァフィスの姿も面白かったが、とにかく日付、時刻、気温、気圧などやたら数字が頻出するのが気になった。それで考えた。文学作品において数字とは何か？

おそらくは形容詞、限定詞の一種というのが正しい答えなのだろう。だが、かなり特異な限定詞だ。22歳と言えは21でも23でもない、22歳以外ありえない。1909年と言えは1908も1910もない、絶対に1909年でなければならない。その差にどれだけ意味があるか、どれだけ価値があるのかはどうでもいい。とにかく、一切の曖昧を許さない、絶対的に正確な限定詞である。

それがカヴァフィス作品にどういう効果を与えているか、人はいくつも指摘できる。素っ気ない彼の作風に貢献しているともいえるだろ

う。ほぼ無意味だが正確な描写の連続はロラン・バルト言う「現実効果」<sup>2</sup>に一役買っているとも指摘できる。だがそうした議論よりも先に思い当たるのは、この数字こそカヴァフィス詩のある特徴を示唆している、こう言ってよければ、これこそカヴァフィス文学のある種メタファーではないかということだ。

カヴァフィス詩において記憶は重要なアイテムだ。それは数字のように正確な再現前、再起を常に狂おしく渴望してやまない。一体カヴァフィスほど正確な再現前、再起にこだわった詩人がいたろうか？たとえば『帰ってくれ』(36:1912)という題名からして直截な叫び、あるいは『灰色の』(66:1917)の「我が記憶よ、あの瞳を昔どおり保てよ/そして記憶よ、わが恋を取り戻せるなら、今夜ふたたび私にもたらせ。」といった懇願、あるいはまた『カイサリオン』(73:1918)の純然たる模象を目にした喜びなど、その例は色々あげることができる。そして、その最も十全たる例、正確な再起への渴望がほとんど剥き出しに晒された詩として、私たちは最晩年の『古代ギリシャ系シリア人魔術師の処方にしたがって』(151:1931)を挙げことが出来る。

こうした過去の再起への狂おしい渴望ぶりは、カヴァフィスにあってそのままエロスの荒々しさを表している。私たちはエロスを語るのに実はわずかな語り方しか持ち合わせておらず、多くの場合、それは社会道徳という掟の侵犯として語られる。実際カヴァフィスにもそうした詩がいくつか見られる(例えば『シドンの劇場、紀元後 400 年』110:1923、未刊詩篇『力を与える』(『精神の成長のためには』)A50:1903;、『快楽の戦士』B1:1894-97;などなど)。

だが、これら過去の再起もまた掟の侵犯として機能しているのではないか。過去の正確な再起など本来あってはならないことだ。 Δεν μπορείς να μεις δύο φορές στον ίδιο ποταμό. 過去は絶対に戻らない。もちろん、カヴァフィスにとっても戻らない。

というよりも、カヴァフィスほど時の流れに畏れ、慄き、また衝かれた詩人がいたのだろうか。おそらく世界中風潰しに探してもいまい。時の流れは人智を超え、ただ『賢者が事が起こる寸前に知る』(46:1915)。誰もが時の流れに押し流され、それに抗い踏みとどまってカヴァフィスから例外的に賛辞を受けるのはせいぜい芸術と母の愛ぐらいだ。マール・ドロローサ 逆に、この流れに無自覚に逆らおうとする「改革屋」 Αναμορφωτή(『あ

るギリシャ大植民地にて、紀元前 200 年』138;1928)はことごとく破滅する。そうしたカヴァフィスの「改革屋」の最大の典型例が皇帝ユリアヌスであることを私たちは知っている。

過去は絶対に戻らない。それは、我々が不死ならざる者であるのと同程度、絶対の真理であり厳粛な掟だ。にもかかわらずカヴァフィスは過去の再起への狂おしい渴望を語り、唐突なその成就すら口にする。そこにあるのは、背徳感といった退屈な、使い古され手垢で摩滅した悦楽ではない。生きる人間の可能事と不可能事のせめぎ合い、そのドラマだ。「イタカ」(31:1911)、「できるだけ」(39:1913)といった生への励ましが刻まれたカヴァフィス詩はあいかわらず人気があるが、ことによると私たちはそれよりずっと広い意味で、カヴァフィスの訓育的側面を捉えなおす必要があるのかもしれない。

ところで、この正確な再起という事態にはある矛盾をはらんでいる。正確な再起を願えば願うほど、再起された意味は膨らみ、歪み、もはや過去の再起ではなくなる。

Θυμήσου, σώμα...

Σώμα, θυμήσου<sup>①</sup> όχι μόνο το πόσο αγαπήθηκες  
όχι μονάχα τα κρεβάτια όπου πλάγιασες,  
αλλά κι εκείνες τες επιθυμίες<sup>②</sup> που για σένα  
γυάλιζαν μες στα μάτια<sup>③</sup> φανερά,  
Κ' έτρεμανε μες στην φωνή<sup>④</sup> — και κάποιο  
τυχαίον εμπόδιο τες ματαίωσε.  
Τώρα που είναι όλα πια μέσα στο παρελθόν,  
μοιάζει σχεδόν και στες επιθυμίες<sup>⑤</sup>  
εκείνες σαν να δόθηκες — πώς γυάλιζαν<sup>⑥</sup>,  
θυμήσου, μες στα μάτια<sup>⑥</sup> που σε κοίταζαν·  
πώς έτρεμαν μες στην φωνή<sup>⑦</sup>, για σε, θυμήσου, σώμα<sup>⑧</sup>

忘れるな、身体よ

身体よ、忘れるな<sup>①</sup>、どれほど愛されていたかだけでなく、  
お前が横たえたベッドだけでなく、  
欲望<sup>②</sup>にはっきりとお前への瞳が輝いていた<sup>③</sup>ことを、  
声<sup>④</sup>がふるえていた<sup>④</sup>ことを——いくつもの障害に  
叶わなかったわけだけど。  
今やすべては過去のなかで、欲望<sup>⑤</sup>が  
ほとんど成就したかと思えてくる——忘れるな、  
お前を見つめた瞳の中で<sup>⑥</sup>それがどう輝いていたか<sup>⑥</sup>、  
お前へ、どう声<sup>⑦</sup>がふるえていた<sup>⑦</sup>か、忘れるな、身体よ<sup>⑧</sup>。

彼の詩篇『忘れるな、身体よ』(74:1918)だが、この詩が回文のよ  
うな凝った構成になっていることはよく知られている。輝く瞳をもつ美  
少年の記憶が、「欲望」—「輝く目のなかに」—「ふるえる声」と同じ  
形象が同じ順序で二回叙述される(②—③—④、⑤—⑥—⑦)。出だし  
「忘れるな」「身体よ」が逆転して終了する(①—⑧)、

とはいえ、同じ記憶であっても、一度目と二度目ではまるでニュア  
ンスはまるで違う。その折り返し点になるのは7行目冒頭の Τώρα「今  
や」だ。一度目はたんなる過去の叙述だとしても、この「今」という  
観点が導入されることにより、二度目の叙述はそれとの落差が強調さ  
れ、過去は戻り得ず、にもかかわらず取り消しもできないという二つ  
の不可能性に引き裂かれている。

だから、一見無関係に見えるエロス詩『忘れるな、身体よ』と歴史  
詩『デミトリオス・ソーテールについて』(90:1919)が同じ構造をして  
いるなどと今ここで指摘することもできるわけだが、今は実際の過去  
と思い出された記憶とでニュアンスに差があることに目を向ける。

『忘れるな、身体よ』では、現実と同じ光景がもう一度記憶で再起  
されつづけたとしても、その意味合いはまるで異なる。正確に再起さ  
れることを希えば希うほど再起された意味は膨らみ、改竄される。再  
起への渴望が高鳴るゆえに、過去に多くの欲望が流し込まれ、旧日の  
情景がもつ厚みは増され、歪み、ついには過去の再起ではなくなる。  
事実、『忘れるな、身体よ』で、一度目の叙述、現実の世界では「いく  
つもの障害に／叶わなかった」欲望が、二度目の叙述、記憶のなかで  
は成就したことへ書き換えられている。

だからカヴァフィスの記憶について、対象物の再現とだけ考えても片手落ちだ。それを欲望の再現前などと言いかえても、事態は変わらない。なるほど、彼にあってエロス、欲望は再起への原動力であり、芸術へのきっかけとすらいえる(『そのはじまり』97:1921)。しかしカヴァフィス詩のダイナミズムは欲望の映像化にあるのではない。むしろ、こう言ってよければ、映像の欲望化にあるように思われる。

### 私は芸術にもたらした

腰かけよう、気分は夢見心地。  
感覚と欲望を 私は**芸術**にもたらした。  
——かろうじて感知できるもの、顔や姿、  
結ばれなかった恋の曖昧な思い出。  
それらを私は**芸術**に委ねる。  
それは美の形相を形作る術を知っている。  
印象たち εντυπώσεις を組み合わせ 日々を組み合わせ  
ほとんど気づかぬうちに 人生を完成化させる。(101:1921)

「芸術」は、複数の印象、複数の日々を組み合わせ、人生を完全なものにする。だとすれば、カヴァフィスの考える「芸術」の条件としてとりあえず二つのことがあげられるだろう。

1)複数の日々を組み合わせるから、即時的、現在時の再構成ではない。「とはいえ当時は何を意味するか見えなかった」(『認識』(70:1918))。過去の再構成であり、どうしても時間的距離をもった、記憶のなかの再構成となる。

2)複数の印象、日々の再構成されとあることから、まず複数性が必須となる。その再構成となれば、そこで基準となる何かが必要になる。その意味で、詩篇『店のために』(40:1913)が参考になるだろう。そこでは、宝石一つ一つが「自然のなかで見えるようとか、学習したようでなく、彼が判断し、彼が欲したように、美しく見えるように」再構成されている。その基準は彼の好みにより、彼の欲望ということになる。

カヴァフィスにあってエロスは、芸術の原動力であり、その基準で

もあった。彼にあってエロスは芸術とダイレクトに接続している。彼が「倒錯(...)は偉大さの源だ。」<sup>3</sup>と書きつけたり、「芸術家は墮落すべきだ」と呟いて E・M・フォースターを狼狽えさせたりした<sup>4</sup>のを、たんに社会道徳への挑戦という面だけで考えるべきではない。

### 同じ場所に

家々の並び、繁華街、通り、  
幾年も幾年も私は眺め、散策した。

うれしいにつけ、悲しいにつけ、お前を創った、  
たくさんの出来事で、たくさんの物事で。

こうして、私のために、お前全ては感覚に変わった αισθηματοποιήθηκες<sup>5</sup>。  
(147:1929)

彼のいう「感覚」、『私は芸術にもたらした』で欲望と対になっていた「感覚」とは、記憶のなかで彼に選ばれ、再構成された印象なのだろう。

それは、生きられた人生から厳選され、再構成され彫り刻まれたエピグラムを連想させる。記述された人生としてのエピグラムもすぐれて文学の一ジャンルであることを思い起こさせる。いや、実をいうと、文学こそエピグラムの一ジャンルではあるまいかとさえ思われてくるのだが、これを検討しようとすればカヴァアフィス論の枠組みを大きく逸脱することになるだろう。

---

#### 【註】

引用されたカヴァアフィス詩について題名は二重鍵括弧内、引用を鍵括弧内で表記し、以下の刊本の Γ.Π.サヴィデイスによる整理番号を記した。Κ. Π. Καβάφης, *Τα Ποιήματα*, τ.Α, τ.Β, Ίκαρος, 1991. Κ. Π. Καβάφης, *Κρυμμένα Ποιήματα*, Ίκαρος, 1997.

詩の試訳にあたって文学的芳香より原詩との対応を優先している。

---

<sup>1</sup> Κ.Π.Καβάφης, «Ημερολόγια του πρώτου ταξιδιού του ποιητή στην Ελλάδα», *Πεζά*, Άπαντα τ.Γ, εκδ. Πανταζή Φακίρη, 1982, σσ. 261-307

<sup>2</sup> Roland Barthes, «L'effet de réel», *Œuvres Complètes tome2*, Seuil, 1994, pp. 479-484.

<sup>3</sup> Καββάφης『詩学・倫理ノート』第7節、1902年12月13日付。Κ.Π.Καβάφης, *Ανέκδοτα Σημειώματα Ποιητικής και Ηθικής*, Ερμής, 1983, σ. 29. Constantin Cavafis, *Notes de poésie et de morale*, traduites par Samuel Baud-Bovy et Bertrand Bouvier, publiées avec la collaboration de Martha Vassiliadi, éd. AIORA, Athènes, pp. 50-51.

<sup>4</sup> Καββάφης宛 E・M・フォースター1917年7月1日付書簡。The Forster-Cavafy Letters, edited by Peter Jeffreys, The American University in Cairo Press, 2009, p.35. Καββάφηςと E・M・フォースターの往復書簡について以下の拙文で翻訳紹介した。茂木政敏「カバヴァフィスと E・M・フォースター——書簡から——」、『日本ギリシャ協会報』150号、日本ギリシャ協会、2022年、pp. 21-27。

<sup>5</sup> “αίσθηματοποιήθηκες = μεταπλάστηκες σε αίσθημα” (Γ.Π.Σαββίδης). *Τα Ποιήματα*, τ.Β, σ.149.